

第 12 号

発行

小松同窓会本部

〒923 小松市丸内町二ノ丸15

石川県立小松高等学校内

同窓会報編集委員会

委員長 宮崎 榮

印刷 北譜印刷株式会社



時は、よく用いる者には親切である。

ショーペンハウエル

詩集「挨拶の詩」

— 詩は志 純粋な魂の個人史 —

校長 鈴木 英章

一冊の詩集がある。同窓会会長仲井先生から頂いた。茜色の表紙、左上程良いところに細長端整な活字で「挨拶の詩」と表題が印刷されている。装飾を拒否した装丁は見事である。著者は西辻明氏(中学42回)。

仲井先生のお話によれば、「西辻氏は私と小松中学同期生で、陸軍士官学校、旧制四高を経て京都大学英文科に進んだ沖町出身の秀才。」とのこと。私が一冊頂いたのは「大先輩の志をしっかりと受けとめよ。」という先生のお心遣いであらうか。

詩集には、一九六五年から一九九五年までに書かれた八十編が創作年代順に配されている。B5版一八三頁。出版元は京都河原町蛸薬師「丸善京都」。

その序文で、実兄の淳氏は、「著者は、幼年時代はもとより青・壮年時代を通して純粋な魂を持ちつづけた。」と述懐する。続けて、挫折した学生運動とその後の必ずしも順風満帆とはいえない実生活が、彼の作品に一種慷慨の気を漂わせていると指摘する。

通読すれば、淳氏の指摘どおり、詩は志。戦後を生きぬいてきた真摯な一学徒の個人史として興味深く読める。表題にもなっている、巻頭の詩「挨拶の詩」を読む。

挨拶の詩

アンニョンハシムニカピョンヤン

朝七時

私の窓に

水の華咲き

野鴨群れる 大同河は

ひととき

茜色に染まりました

—— 大同江を望むホテルの一室から眺めた平和な古都平壤、早朝の情景。表現は直截簡明。「美しきものは永久に喜びなり」の詩句を思い起こす。西辻氏は遙か高句麗の時代・文化にまで思いを馳せたことだろう。日本は女王卑弥呼の時代。河面を染める「茜色」について言えば、「サムミヨリ古墳」と題する詩の中で、「雲華 朝やけの色にそまる／これ今に伝わる／朝鮮民衆の色とも思われます」と歌っている。

こう考えると、冒頭の挨拶は西辻氏が万感をこめて送ったものなのだろう。澄んだ音色で私の耳に響く。なんと美しい挨拶。時は一九六五年早春。朝鮮休戦協定成立後十年余。街から早起きの子供たちの歌声が聞こえてくる。詩人は、この一期一会にもう一度美しい挨拶を送る。

昼下がりに、西辻氏は雪降り積む街に出る。ホテルのラジオは米軍北爆開始のニュースを流していた。——

銀一色の街

私の毛帽子に 雪降り積み

私は見ました

稀なもの

そぞろ歩く老爺の

白い眉から こぼれ落ちる雪

雪……

—— 二回の戦争を生きぬいた老人との出会い。この老人を、全ての記憶を、掻き消す如く降る雪に向かって詩魂は叫ぶ

ふりしきる雪よ 告げよ

白頭山の物語を

戦士らの 屍 埋めた 旗の色を

暁 流された 血の鮮やかさを

—— 白頭山は聖なる山。私たちの郷土の白山と同じ。この後に続けて、糸つむぐ乙女ら／灼熱の鋼 うち鍛える若者らに一九五〇年(朝鮮戦争勃発)に始まった苦難の年月を告げよと歌う

堪えぬいたあなた
戦いぬいたあなた
あなたがすべての
今日の喜び

アンニョンハシムニカピョンヤン

—— 雪の中に消えてゆく老人に、詩人は敬愛をこめた挨拶を送る。この夜、友人たちと語りつくし、語り明かす。朝やけ。



(高校8回)

しののめの空に屹然とそびえる平和の象徴を見る。――

チョンリマ
千里馬の像
モシゴシ
牡丹峰は輝きわたりました

アンニョンハシムニカ
ピョンヤン
――一九六五――

一つの国とそこに住む人たちをよく知ることの大切さを考えるとき、「挨拶の詩」は今日の意味を持って読む人の心を打つ。本校図書館にも一冊頂いた。若い人たちが直接手に取り、一読してくれることを期待している。

特別寄稿

校章デザインの記事

秋山 宏

廊下の向こうから、当時生徒会の役員をしておられた山森實君がニコニコしながら近づいてくるなり、ボンと私の肩をたたいて、君の図案に決まったよと教えてくれた時のことを思い出しながら筆をとりました。

今から五十年前も前、終戦により、アメリカの進駐と共に入って来た「民主主義」という言葉が新鮮で、逆に、なにかケチをつけたいときには、「封建的」とわめいた時代のことですが、教育の民主化とか機会の均等という見地でしょうが、学校の制度も目まぐるしく変わりました。

現在の小松高校の前身の幾つかの学校が総合制ということと一緒になったのも、その頃のことです。私が二年生だった昭和二十四年に校章の募集があり、幸運にも私の図案が入選という、またとない光栄に浴しました。

この度、当時の経緯などを書くようにのお話があり、



デザインの過程で考えたことなどを、披露させて頂く次第です。

ともかく小松高をデザインの中に織り込みたいの思いで、全体の形が小松の「小」のイメージにならないものと松葉模様をいじくり回し、結局今のような三角を基調とした形にたどり着きました。

松葉のトンガリ具合をどのくらいにしたらバランスが良いか、角度を変えて何枚も描き直したものです。

また、高の字は、当然、中央に据えるにしても、それだけではどうにも据わりが悪い感じなので、蛍雪時代↓雪の結晶という理屈をつけて六角形で囲みました。

これで一応、校章としての格好がついたようなものの、全体として華奢な感じが否めないのが気になり、背景として、郷土の山である白山を配したというのが楽屋裏の事情です。「ラ小松ラ小松」とり

フレインのついた独特な小松中学の校歌「加賀野の果ての白山よ」は、今でも望郷の念をそそります。

以上、図案を考えた頃の思いをたどってみましたが、現在の生徒諸君に、小・松葉・白山などを感じとって頂けるものやら心もとない思いもするだけに、この拙文でデザインの意図を納得いただければこの上ない喜びです。

ただ、実際の帽章は、技術的な判断から、私の図案より肉ぶとにして作ったとお伺いしております。

十年ひと昔と言うことからすれば、ずいぶん昔の話、世代が移り変われば作者不明という風化にさらされても仕方ない処でしたが、同期の篠田清徳君の自分史の中で取り上げてくれ、また、井口哲郎君のお力ぞえで「白峰」32号でご紹介いただいた機縁が重なって、この度の会報での機会を与えて戴いたことに感謝いたしております。

未筆ながら、小松高校の益々の隆昌、今後とも有為な人材の輩出を心から祈念申し上げます。 (高校2回)

卒業写真

宮崎 榮

去る三月七日の小雪が散らつく中で、小松高校の卒業式が終わり、四百有余の若者達が巣立って行った。最近地球温暖化の影響か、積雪が少ないのに、今年は日本海低気圧の影響か、寒波の訪れが烈しくて、雪のない年にしては珍しい程の寒い冬であった。

ところで私が小松高校の前身である小松中学を卒業したのは、もう半世紀以上も前の昭和十一年の同月同日であったが、この年は雪が多かった。今でも卒業写真を見ると、前列の先生達の足元は真白で、机を五段に積み上げた仮設舞台へ五列に並んだ六十七名の卒業生達の左右両翼の樹木は枝もたわわに雪で覆われ、最上段は学校正面の校舎の雪が、今にも生徒達の頭上に落ちて来そうな気配で、八つ切大の当時の卒業写真は四方を雪がマスクしているような風情である。

何時の頃だったか、ある校長の随想に、校長室に備え付けの卒業アルバムを繕くと、私達三十三回生の写真だけ、

雪が沢山写って居り、他の期の写真にはそんな例を見ないと書かれてあった。そう言えば昭和十一年は二・二六事件のあった年で、当時の新聞記事で、東京でも珍しい雪が永田町附近の叛乱軍の兵士達の上

上に積もっていたとの報道を読んだかすかな記憶がある。この年は小松でもこの卒業写真のように雪が多くて、卒業式に参列するために芦城公園のグラウンド（今の博物館附近）の雪を踏んで登校する

ために、ズボンの上に巻くゲートルが濡れて、帰るまでに乾かせなくて困った。当時は質実剛健が学校の方針で、しつ

は実に厳しくて、登校、下校には必ず編上靴を履いて、必ずゲートルの着用を厳重に仕込まれて、ゲートルの最後の三角型の縫い目を、ズボンの縦の筋に合わせるのに苦労したことを、今でもかすかに覚えてる。（中学33回）

ある悔恨

山下七志郎

今から考えると、明治大正期の日本文学の主流は、やはり江戸文化の直系たる夏目漱石、芥川龍之介らであったと言わざるを得ない。

田舎育ちの文学青年など到底太刀打ち出来る筈がなかった。徳川三百年の蓄積が西欧の衣裳をまとって現れたのだ。当時、外国語を学ばなければ知識人に非ずと言う声につられ先を争って人々は舶来の新文芸に飛び付いた。

それから、一切の思考が特異点において停止する奇妙な時代が続いた。

今や戦後五十年、痛切な反省がわが脳裏を駆け巡る。世

界と日本を冷静に見る眼、しゃきっとした自己を、おれは育てようと努力したか。

さて、日米戦争の暗い予感が次第に迫ってくる昭和十四年ごろ、京都一中から転任してきた体操の先生が、天守台の下の叢に生徒を坐らせ、前任地の中学校がどんなに優秀であったかと毎回同じ説教を繰り返した。戦後、その教師の業績は知る人ぞ知る。

戦前、英語の鈴木先生は受験期の私どもに受験用の英語を教えずに、君たちヨーロッパ文学を研究するならキリスト教を勉強しなければならぬんだよ、とさりげなく語った。半世紀後、民族と宗教の凄絶な絡み合いを見よ。先生の予見は正しかった。

青春特有の虚栄心と無知が真実の洞察をどんなに妨げたことか。追憶の風景は懐かしいが、苦い悔恨がしきりに胃の腑から込み上げてくる。（中学38回）

その処分対象物品の中に旧制第四高等学校所蔵機器の大部分が含まれていた。現在では全国でも旧制第三高等学校所蔵の物理機器が京都大学に保存されているのを除いては、金沢大学にしか残されていない程の貴重な文化遺産である。石川県当局はみすみす粗大ごみとして処分されることを心配して、大学に

旧制四高の物理実験

機器が甦ったいきさつ

関戸 信次

金沢大学理学部と教養部には、旧制第四高等学校が所蔵

していた明治・大正・昭和初期に欧米から輸入し活用されてきた貴重な物理実験機器が受け継がれ、永い間倉庫に眠っていた。

ところが平成五年から六年

にかけて、城内キャンパスから角間の新キャンパスへの移転に際し、当然のことながら、

学内の膨大な研究用、教育用実験機器類の移転を考えねばならなかった。新キャンパスの収納能力に限界があることから、移転の要、不要機器の分別を余儀なくされた。そして一部の機器を他へ移譲するが、廃棄処分することを決定した。

私の作業はこの時点からはじまったのである。先ず大学は文部省へ提出するためを理

由に、譲受したい物品の一つひとつの名称と内容を記した一覧書類の提出を求めてきた。何分購入して七十年を経過し、戦後の移転ごとに散逸した機器類である。部品は欠落し、かびとはこりに覆われたさびついた機器の掃除から始める手さぐりの作業であった。それでも曲形なりにも総数八〇九点の譲受申請書を提出してきたのは、一冊の奇妙な私的メモ風の台帳のおかげであった。

昔の高校や大学には、職人肌の立派な助手の方がおられ自分の所管する実験機器を一点ごとにスケッチして保管されていたのである。大学当局でさえ、一冊の台帳も保存していなかったなかで、この「物理機械図入目録」が私の作業を大幅に短縮してくれたのだった。

収納容器に雑多に分散収納されている部品を捜し出し、補修しながら実際に動くようにまで実験機器を仕上げるために、この図入目録の力は偉大なものであった。

明治十九年、第四高等学校(四高の前身)の創立と共に購入され、幾多の人材育成に役立ってきた物理実験機器

が再び日の目を見ることのできる日が一日も早いことを願って止まない。(中学45回)



俳句に想う

高田富士子

昭和九年に私は県女に入学しました。そのとき父は私を忠谷書店につれてゆき定価貳圓参拾銭と記した漢和大辞典を買ってくれました。今でも大切にしています。さて私は今、NHK俳句友の会に入会していますが、その友の会の発行している「俳句春秋」は全国より毎回二千余りの投句があり、その中から俳人の諸先生方が選ばれた秀句を発表して会員に送って来ます。毎回審査委員長の飯田竜太先生も秀句を二十二句選ばれてありますが、丁度三年前のことその二十二句の中に、遠蛙父に貰ひし辞書を引く 石川県 高田富士子

と、ありました。そして次のように書かれてありました。『辞書の新旧にこだわることは貰うという事は一人前になった証し。また、このような遠蛙の場合は一般に夜のこえ。あたりが静まりかえった晩春の夜一人机に向かつて辞書を引く。或はまた生前父から貰った形見の辞書という解もあり得るが、そこまで深読みする必要はないだろう。』

と。全く私の作句の状況の一部始終を先生は見つめておられたのではなからうかとさえ思ひ大変感動しました。私は背伸びしたり忝んだりしつつ免に角統けることに意義ありと思ふ今、先ず俳句入門にお誘い下さった方々、そして諸先生方に心から感謝捧げます。

晩春

- 背なの児を
- あやす店先春いちぢ
- 片言の
- 児の頬まろし月おぼろ
- 旅名残る
- 花も名残りの車窓かな
- 訃報来し
- 彼方へ合掌四月果つ
- 短夜や危篤の犬を撫で通す

○春愁や
すべてのものに限りあり
研ぎ立てて
切る筈の吸いつけり
(県女26回)

近況

大田寿美江

県女三十七回生の皆様いかがお過ごしでしょうか。北陸は例年になく、雨も少なく、陽光に恵まれておりますが、いまだ朝夕肌寒さを感じる今日此の頃です。

阪神大震災から約一年半、特に、阪神地区の被災をうけられた皆様の其の後の御様子について、小松地区同窓生一同、心から御案じ申しております。

さて、昨年から二年に一度の同窓会が京都部会が中心となって開催の予定でございましたが、あの時はとてもその気になれず、一年延ばすことなり、あちこちから、どうなったのかとの、お問合わせがありました。

そこで今年九月下旬〜十月初旬にかけて、小松地区で、開催しよう準備に入りました。お里帰りもかねて、是非

一人でも多い皆様の御参加をお待ち致しております。

県女三十七回生も、白楊同窓会では最終学年であり、その卒業生も、六十五才という年齢になってしまいました。気力はあっても、体力は今一つです。でも今こそ人間集大成期です。社会的にも、家庭的にも、夢をいだいて、うしろを振り返らず、前をむいて歩きたい。そして、これから的人生に、もう一度、それぞれの色の花を咲かせてみたいものと希っております。

今は亡き母も、娘である私のしらない心の底を友人に語っていた事でした。

なにげない友人との語らいの中に人生のやすらぎがあるような気がします。

三十才後半の我武者羅の人生、のんびりしようと思った頃に、体の不調、しかしそれも自分に与えられたものとして、病と上手につきあって一杯生きようと思っています。皆様のなつかしいお顔、そして思い出を、うかべ乍らお会い出来る、その日を楽しみにしております。(県女37回)

元気でーす!

中出 英子

平成八年二月十七日に、三年ぶりの関西小松同窓会の総会が、ホテル阪急インターナショナルで開催され、私共県女三十七回生九名が、参加させていただきました。当日は、荒模様の悪天候に、積雪のおまけまでつき、スタッフ一同、出席者数を一番心配しておられたようです。女性も、ブーツにパンツルックの方も多々ありました。

当日のアトラクションに、東京から、尾坂尚子、洋子ご姉妹をお招きして、素晴らしいイタリア歌曲を聴かせていただきました。戦後間もない頃、女学校の講堂で、長門美保さんの蝶々夫人を拝聴以来の事で、私達一同、大へん感激いたしました。此の企画を提案された安明さん(高八回)それをバックアップされたスタッフの方々には厚くお礼申し上げます。

私達、(県女三十七回)は、今年誕生日が、来れば、それぞれ六十五才を迎えます。一つの節目として、健康に留意し、三年後に、また今年出席

したメンバーが、つつがなく、顔を合わす事を、願って止みません。私事ながらこの総会の日と前後して、小松同窓会創立八十周年の回想録に寄稿した私の母(県女八回)が、亡くなり、私にとりましても想い出深い年になりました。

こ雪舞う 誕生日待ちて母の逝く(九十二才と五日)母逝きて 忌明けその日はひなまつり (県女37回)



父と自転車

加納久二枝

昭和九年。私が寺井から、小松の学校へ通っていた頃。毎朝出がけに父が、

「転ぶな、自転車こわれるから」「怪我すると石子の(中田整骨院)へ行かんらんから。」私は腹立たしかった。しかし考えてみると父の言うのも無理がなかったのです。

自転車は二十八インチの大人もので、一五四センチの私の背では、お尻を左右に動かしてやっとペダルに足がとどくのです。荒屋までくると、腕白小僧達が、「やあ、でっかい自転車。」とはやし立てます。恥ずかしくとも、歩きたくない道程ですから、矢張り自転車です。

やがてその頃、弟も小松の商業学校へ通い二十六インチの自転車も買いました。昔は一台、一台に税金がかかりましたが、父はつつましい事を言い乍らも子どもの教育には熱心でした。

こんな事もありました。下校の途中で島田の踏切を渡るうとして、ことごと線路にはまってしまったのです。やっ

との思いで自転車屋にたどり着き、三十銭で直して貰いました。安いと思って話すと、父に、「苗籠四つのだ。」

と言われたのです。父は竹細工の職人です。朝から一日中店先に座り働きつづけて竹細工の仕事をしています。当時は二台も自転車があれば良い方でした。「転ぶな」の父の一声。背中に日本刺繍の大きな木のわくをかががされて乗る自転車の私に、「やあ、紙芝居や。」と又はやし立てる子。

今振り返って見ると、親の庇護のもとに過ごした日々が何ととっても懐かしく思うこの頃です。(市女9回)

同窓会設立の功労者

松下寛君を悼む

安井健次郎

『カンさん』、そんな愛称で親しまれていた松下君。君は何故そんなに急いで逝ってしまったのですか。昨年11月の東京での同窓会ではあんなに元気だったのに。それが僅か一ヶ月足らずの入院で四月四日、あっけなくあの世に逝ってしまうなんて。

思えば君は、小松同窓会の

組織づくりに非常に熱心であった。終生をかけたといっても過言ではないと思う。在学中は生徒会長を務め、卒業後は高校同窓会の創設に中心的役割を果たされた。中学創立60周年を期して、中学・高校・県女・市女を併合し、小松同窓会に移行させるのに奔走されたことも私達の記憶に新しい。その後、70周年、90周年と絶えず影の力として同窓会の発展に情熱を傾けられた。

当時、関東では同期の本谷勇君等を中心に同窓会組織が出来ていたが、関西では80周年以来何時となしに消滅してしまいました。しかし甲子園初出場を機に、90周年を目指して関西支部を復活すべく、同期の丸次・松田・西野・大音師君等に働きかけ幾度となく大阪に足を運ばれましたね。現在の関西支部の基盤が出来たのも、君の努力が大きく作用したものと思います。

君が自発的にそして積極的に動き廻った事を知る人は少ない。時には持前の強引さが災いして敵もあつたと思うが、君の組織づくりの熱意と粘りが現在の同窓会の全国的発展に寄与したと思う。

君の働き掛けが緒となつて
今、大きく花開いた小松同窓
会は伝統を重ね、益々発展を
続けることでしょう。

長い間、本当に御苦労様で
した。功績を偲び、心から御
冥福をお祈りします。合掌。

(高校1回)

俳句

梅雨兆す

高林花野かたしな

一戦記ひとり夜長に読み
返す

でで虫に佇ちて濡れ身を
忘れけり

朴の花東西南北馳せしこ
ろ

野菊濃し終生指輪せぬ我
に

左眼の夕べかすみて梅雨
兆す

(県女27回)

障書を持った子らに

習う

四日 進

中学校の教師として勤めて

三十年になりました。

最近の学校現場には、不登

校、校内暴力、いじめ等さま
ざまな難問が生起しており、
いろいろ手立てを講じてはい
るものの、簡単には解決でき
そうになく、現場をあずかる
教師の悩みには深刻なものが
あります。

ところで、現在の勤務校で
ある小松市立丸内中学校は、
障書を持った子どもたちのた
めの特殊教育学級を開設して

います。通学区域は小松市全
域と能美郡の一部の町である
ため、相当遠いところから、
通学の不便をのり越えて毎日

登校してきています。
この子どもたちと触れ合う
ようになって気づいたことで

すが、この子らは自分の障害
を決して苦にしていなとい
うことです。障害と上手につ

き合せて、実にはのびのびと生
きています。言葉が不自由な
上に、手足に障害があり、走

行さえも困難であるのに野球
部に入って、白球を追おうと
している子もいます。この子

は、自分の障害の原因につい
て知っています。

この学級の子らは、強烈に
個性を發揮しながら仲良く協
力し合せて、現在を生き生き
と生きています。明るくすが

すがしい姿は、見守るものの
心に暖かいものを送り込んで
来ます。煩惱を超越したかの
ような純粹さに、人間の原点
を見る思いがし、この子らか
ら人としての生き方を教えら
れ、また、元気づけられてい
る毎日です。(高校10回)

オウムと連合赤軍

出村 昌敏

昨年从今年にかけて、新
聞紙上にオウム関連記事が載
らない日はないといってもい
いほどの過熱報道だった。

オウムの記事を読みながら
思い出すのは自分達が高校時
代におきた連合赤軍事件であ
る。あの浅間山荘である。

「左翼」と「宗教」という装
いの違いはあるが四半世紀の
時をへだてて両事件には共通
性が多いように思う。

社会から隔絶した集団によ
る凶悪犯罪であること、内部
での凄惨なリンチ殺人、集団

の幹部たちは若くいずれも一
流大学に入学した学業優秀な
者達だったこと。一人よがり

で難解な論理、武器への執着
高度成長とバブルという集団
を生み出す社会背景、そして

過剰な報道、等々。

当時高校生だった私は大き
なショックを受け、ロングホー
ムの時間にテーマとして取り
上げ、クラスメートに議論を
ふっかつたことがある。クラ
スメートはいささか面くらっ
ていたが、担任だった矢原先
生は真摯に受け止めてくれた
ものだった。

正直白状すると、当時私は
連合赤軍に対し「なんとひど
いことを！」と怒りながらも
社会から自らを隔離し、やり
たい放題をやった彼らに一種
の羨望の念をいだいていた。

さて、今の現役高校生たち
はあのオウムをどのように考
え感じているのだろうか。一
度話し合ってみたい気がする。

ただ私達の頃と今との違い
は、犯罪者集団のメンバーを
アイドル化することはなかつ
たということである。上祐ギヤ
ルなど当時は考えられなかつ

たが今の若者は正直なのかも
知れない。でもそれを作り出
したマスコミは恐いと思う。

さて、話も口調もコロッと
変わってコマージュシャル。

今年是小松で三年ぶりにみ
んなで歌う第九コンサートが
十二月二四日に行われます。

指揮は大町陽一郎氏、オケは
アンサンブル金沢、ただ今合
唱団員を募集中です。同窓会
の皆様の中で参加御希望の方
はぜひ事務局の私まで御一報
ください。電話は自宅〇七六
一―二二―四一〇二、職場〇
七六二―二二―四一〇二です。
フロイデ！ ベートヴェン
の第九で世紀末をふきとばし
ましょう。(高校26回)

小松同窓会新年会開催

平成7年度小松同窓会新年
会は、平成8年1月30日午後
6時30分から、小松市本折町
小松グランドホテルで開催さ
れた。

会員、教職員230余名を前に、
先ず、仲井信雄会長が挨拶に
立たれ、創立100周年記念事業
に対する協力要請、昨年7月
の総会以降の役員異動案の提
出、そして、本年7月の総会

をもって会長を退任する旨の
表明、がありました。役員異
動案については、その場で承
認されました。

引き続き、永年勤続同窓会
役員15名と事務職員1名に、
仲井会長より感謝状と記念品
が贈られました。次いで、徳

田八十吉次期会長、清水郁夫

校長より挨拶を頂き、懇親会に移りました。

亀田作雄氏(中学22回)の、益々若い「乾杯」で開宴しました。久闊を叙す声があちこちに飛び交い、談笑が弾み、酌に回る人、握手を交わす人、と



いつもながらの、賑やかな同窓会風景でした。

宴はたけなわではありましたが、9時近くになり、壇上で4校の校歌を合唱したあと、恒例となった、小松中学校有志による「門出の歌」が声高らかに歌われました。最後に、宮川恒氏(中学26回)の音頭で万歳を三唱し、散会しました。総会、新年会と、2回にわたり、司会の大役を果たされたり、上出雅彦氏(高校22回)に厚くお礼申し上げます。

蛇足ながら、当夜は、小松同窓会の新年会が終わるのを待っていたかのように雪が降り出し、翌朝までに10センチ

近くの積雪がありました。感謝状を贈られたのは次の皆さんです。(敬称略)

- ▼永年勤続役員
- (副会長) 山上公一、徳田美代子、南愛子(監事) 福田芳子、伊勢弥生(庶務) 北村節子、浜野光代、木下甫計、中村禎(会計) 湊道子、井川彦二、吉田綾子、久木繁忠、高尾征武
- ▼永年勤続事務職員 藤田紀子

第五回関西小松同窓会 開催

平成八年二月十七日六時より阪急インターナショナルホテルに於て第五回関西小松同窓会が開催された。当日は大阪では珍しく積雪に見舞われたが、本部の仲井信雄会長はじめ、清水郁夫校長、西部英次郎東海小松同窓会会長、堀口外茂雄百周年記念事業委員長代理の御臨席の下、一三〇名の参加を得て盛大な会となった。

開会宣言の後、昨年の阪神大震災犠牲者と物故者に対して一分間の黙禱をささげ、『方丈記』の「行く河の流れは絶えずして然ももとの水に

非ず」とのナレーションの中で、関西での不思議な出遇いと人の世の別れを味わった。総会に入り、議長に川本八郎氏(高校5回)が選出され、丸次英治会長(中学46回)外、高校4・5・6回の役員が退任し、次期7・8・9回生中心に新役員が改選された。丸次会長は約五年間関西小松同窓会の発展に苦勞されたにもかかわらず、これひとえに役員・幹事一同のささえあったればこそと挨拶された。次期会長には旧役員の中野弘二氏(高校4回)が選出された。

来賓方は口を揃えて第五回総会のお祝いと震災の労をねぎらわれると同時に、来る百周年記念事業に向けてのご理解とご支援を依頼された。尚、この度の総会には本部より多額のお見舞金をいただき、それにより被災同窓生を招待した。総会議事すべて終了後、小



松同窓会次期会長徳田八十吉様のメッセージを携えて堀口氏により乾杯の音頭がとられ、アトラクションに入った。清水校長のご紹介で音楽の恩師尾坂薫先生の御息女、二期会のメンバーであり同窓生である尾坂尚子、洋子様御姉妹による懐かしの歌曲が披露された。出席者一同ディナーショーのようなひとときを愉しみ、非常に好評を博した。最後には例により四校の校歌を合唱し、県女37回生は「ふるさと」を、中学有志は「門出の歌」を歌い、それぞれいやが上にも盛り上がった。副会長中山稔夫氏(高校4回)の発声で万歳を三唱、再会を期して幕が下りた。司会は現読売TVキャスター清水一興氏(高校7回)と安明(旧姓藤野・高校6回)でした。それぞれの同期でリッチなホテルでの二次会が深夜まで続き、尽きぬ話に花がさいた。(高校6回 安明和子記)

白楊会関東支部 総会便り

今年はいつまでも寒さが残っておりまして東京の桜も足踏み状態のくもり空でした。

4月8日、ホテル国際観光に31回生32回生のお世話で席を設けて頂きました。来賓として、田所孝子先生が御出席頂き昭和二十年三月に小松高女に奉職され、小松は人情厚く穏やかなよい所で三年余りの在職でしたが楽しい思い出の地でしたとの嬉しいお話をして下さいました。先生の教えを受けられました39回生のテーブルの席につかれて、皆様と懐旧談に花咲いておりましたようでした。中島栄美子様の独唱に聞き惚れ、中島様と本谷様の御指導で一同校歌斉唱しましたが、皆様の頬一段と紅潮し、娘時代に返った楽しい一刻でした。(県女27回 北山寛子記)



文化部発表会(ギター一部)

過去10年間の合格状況

Table showing admission statistics from 1987 to 1996 for various universities, categorized by public/private and national/public/private.

平成8年3月卒業生の主な進学先

Table showing the main destinations for graduates in March 1996, categorized by private/public and national/public/private universities.

同窓会事務職員交代

小松同窓会事務職員・藤田紀子さん(高校24回)は、去る3月31日をもって退職され、小松市役所に復職されました。藤田さんは、昭和63年1月以来、8年2ヶ月に亘り、小松同窓会のために精励されました。新しい職場での活躍をお祈りします。

尚、4月からは、村井恭子さん(高校34回)が着任されました。よろしくお願ひします。



本部だより

◇同窓会報「天守台」第12号をお届けします。早いもので第1号の発行から既に5年半の歳月が経過しました。これもひとえに会員の皆様のご協力のおかげと思っております。編集委員一同、より一層の紙面充実を目指してまいりますのでよろしくご支援の程。

校創立百周年記念事業の一環として、『百年史』の刊行が計画されています。つきましては、中学・県女・市女・高校(特に昭和20年代・30年代)の各種資料(学校生活で使用した教科書類・諸行事のパンフレット・学校新聞等の印刷物、写真)をお貸し願えませんでしょうか。事務局までご一報下されば、お借りに参上したいと思えます。ご家庭に埋もれている貴重な資料の便りをお待ちしています。

◇今年度の同窓会事務局のメンバーは次の通りです。ご要望、アドバイス等何なりとお寄せ下さい。

- 吉田洋三 加茂達子
酒井隆志 渡辺知子
村井恭子(同窓会館常勤)

第13号の原稿募集

- ◎メ切 平成8年11月30日
◎内容 自由(在学中の思い出、近況報告、趣味、紀行文、俳句、短歌等)
◎長さ 六千字程度
◎送先 同窓会事務局宛
◎発行 平成9年1月